

文庫

●柴田元幸著『代表質問』 ことばを通して独創的な世界を拓(ひら)いてきた作家や翻訳者らを相手に、著者が読者代表で質問した16のインタビュー。作品の読み解きを村上春樹から引き出し、原作者と翻訳者とのやりとりから生まれ出る言葉、さらにはジョン・アーヴィングとの架空の対話まで、多彩な話題満載の文学論でもある。(朝日文庫・1029円)



●読売新聞大阪本社社会部著『性犯罪報道』 裁判員制度導入以後、レイプなど性犯罪の量刑を見直す動きが始まっている。殺人にもたとえられる深刻な傷を被害者に残しながらも重大さが理解されてこなかった。警察に届け出る被害者は4%ともいわれる。その被害と報道の現状を掘り下げた連載を加筆・修正。坂田記念ジャーナリズム賞特別賞受賞。(中公文庫・680円)

●フィリップ・カーター著『骨の祭壇』上下 スターリン時代の強制収容所脱出劇と冷戦期ハリウッドの事件がもつれにもつれ、現代アメリカの女性弁護士の身に危機がふりかかる。聖杯伝説にも似た謎、どんでん返しが連続のド派手な展開。国際的に活躍するある作家が変名で書いた小説。(池田真紀子訳、新潮文庫・上746円、下788円)

新書

●小山真人著『富士山 大自然への道案内』 富士山は2900年前には頂上が二つあった。平安期の貞観噴火前、富士五湖は四湖だった——地層などに残る火山活動の跡を七つのコースでたどり、案外知られていない富士山の自然史を解説する。世界文化遺産登録に沸いているが、貴重な自然遺産としても広い視野での保全が望まれる。昭和初期、山頂でゆで卵ができるほどの噴気があったとは！(岩波新書・945円)

●石井正己著『文豪たちの関東大震災体験記』 焼け跡を歩き多くの死体を目にした芥川龍之介。避難生活で絆を体験した宇野浩二。被害にあった人とそうでない人の温度差をとらえた佐藤春夫。新しい東京の出現を期待した田山花袋。朝鮮人虐殺に人間のあさましさを痛感した折口信夫。今日の状況とも通じる文人たちの体験や見聞を集成。(小学館101新書・777円)

●金丸弘美著『実践！ 田舎力』 副題は「小さくても経済が回る5つの方法」。野菜や魚に生産地で付加価値をつける「六次産業化」も、旧来の大量生産的な発想や料理のできないおじさんだけの会議ではうまくいかない。食環境ジャーナリストの著者が、人材活用や食材のテキスト化、観光との連携など新たな切り口で再生・活性化した各地の事例を紹介。読んだら行ってみたいくなる。(NHK出版新書・819円)